

からくり絵本

清水鱗造

灰皿町

橋脚の多数の直方体

海の上を走る高架道路へ向かう陸からつづく入口部分が、多数の直方体が不規則に並んだコンクリート塊になっている。まだ新しいコンクリートだが、二百年先までは気にしなくていいというほど頑丈に造られているらしい。道路は海上にかなりの高さで設置されていて、陸の橋脚の始まりから高く湾曲して海に張り出している。この橋脚部分に〈巢〉を自由に造ろうという計画が発表された。

比呂武^{ピロン}さんは海に張り出すところにある丈夫な金属のはしごを六メートルぐらい上ったところにあるコンクリートの平面から〈巢〉を造りたいと思った。入口を造る目安の平面の高さが気に入ったからだ。使われているのはしごは俗に言う「タコ足はしご」で、危ないと察知したときには左右から吸盤付きの足のような粘着ひもが出て、体にねっとり巻きついてくれる。さらに上の高架道路が走っている平面までは数メートルある。この高さまでたぶん〈巢〉が造られるだろう。三階分、十メートルほどの高さのスペースを使う。

比呂武さんはとりあえず仕事の合間と夜間に、平面部分に手すりを付けようと思った。仕事はコンピュータのネットワークを常に使うデスクワークなので、もし〈巢〉にいろいろ据え付けることができれば、いつも〈巢〉に籠もっていることができる。

町の道路整備課は、製造やメンテナンスの手法を確立してしまい、今はこの地域の施策にしたがい〈巢〉を造らせる「遊び」をしているのだ。

コンクリート材はずっと進歩してきたが、耐性、使いやすさ、材質などこれ以上は改良する必要がないところまで進化した。もちろん血みどろの進化の過程があったのだが、いざ目的に到達すると、すぐにそれが当たり前のようになってしまう。ユーザーに自由に扱わせて無茶苦茶な遊びもさせて材料の劣化の具合を観察したり、データをとったりする段階がかなり長く続く予定になっている。生物はどんなふうに材料を使うか予測不能なところがあるので、研究のためにビッグデータを集めたいのだ。

コンクリートでできた壁も入口用に指定されている部分があり、ここを破ると巢を造るセットの空間が始まっている。入口用の壁のなかにこぶし大のカプセルが仕込まれて、その中に『巢造りの基本』という説明書が入っている。

道路製造資材は耐用年数がだいたい二百年ほどと設定されているので、メンテナンス代が余ってしまう状況だ。それに懐かしの自動車交通のための道路は郷愁を味わうためのもので、空中に設置されたチューブの実用的なスピード道路ほどには使われていない。

比呂武さんの〈巢〉

比呂武さんは軽い金属のパイプを、数日に分けて運んでいこうと思った。しかし、その前にせっかくなので橋脚からの景色をのんびり眺めるために籐の椅子を置いてみようと思う。仕事の前に朝から巢造り現場に出かけ、まず籐の椅子をロープで結んでズボンのベルトにつけて、はしごを登った。

平面に出ると四メートルの幅、奥行き二メートルほどの広さだ。入口への通路になるここは高さが六メートルほどあるので、手すりのない状態ではなにか落ち着かない。背面のコンクリートを破壊して〈巢〉の空間を確保すればベランダになるので、最終的に籐椅子や鉢物の植物を置ける。あるいは〈人工地面〉にして遊ぶこともできる。籐椅子を最初に据えるのはいいアイデアだと思った。

平面に出てからロープを引っ張ると籐の椅子はとても軽く、すぐに上がってきた。これを背面のコンクリートに近づけて置き、ゆったりと座ってみた。

コンクリートの平面だけで近くは殺風景だが、背中側に壁があるので安全にゆっくりと景色を見られる。

遠く山並みが連なり近くに公園を含む林があり、ところどころに低いビルが数棟ずつ立っている。コンクリートの最上部の高架道路を走る車の音がときどきかすかに聞こえる。さらにその上の空中を走るスピード道路の「チューブ」は完全防音がほどこされて

いる。マットレスを持ってくれば、ここで昼寝しても楽しいかもしれないと思った。籐の椅子は街の古道具屋で買って運んだのだが、「巢を自由に造ろう」という計画が町の道路整備課から発表されてから、近所にできた「巢造りガラクタ市場」に行けば、いろいろ使える家具も買うことができる。この平面にしばらく居て、気に入った空間に間違いないと確認できたら入口用コンクリート面の破壊の作業に入る。破壊道具は町の道路整備課で借りられる。高架道路構造物に巢を造ることを奨励して実行させるのが道路整備課の仕事だ。

数時間、景色を眺めてこの場所の第一印象は間違いなかったと思った。次の日にコンクリートの破壊道具も借りてこようと思う。

気持ちのいいそよ風が吹き始めた。少し眠くなったがさすがに高さからいつて居眠りすると危ない。籐椅子の肘掛けに腕を載せて、頬杖をついてみた。青空に白い雲が流れるのが眠い目に見える。遠くの林で小鳥が不規則に鳴いていた。目を左のコンクリートの側に向けると、はっとした。

二匹のトカゲが壁をちよろちよろ這っている。彼らは足に吸盤があり、垂直の壁でも自由に走れる。立ち上がって近づいても、逃げない。どうもあまり人間を見たことがなさそうだ。壁の上のほうを見ると、コンクリートブロックは三メートルほどで一区切り